

サンクト・ペテルブルグ：ロシアのキリスト教 教会の中心地として

ミハイル・シュカロフスキー（サンクトペテルブルグ国立中央文書館、
ロシア／センター 2008 年度特任教授として滞在中）

サンクト・ペテルブルグは3世紀にわたるその歴史の大半、かなりの程度、ロシア国家のキリスト教会の中心地の役を果たしてきた。建都後間もない1721年、この北の首都には最高宗務院—ロシア正教会の統治機関が設立され、1918年初めに廃止されるまで存在し続けた。サンクト・ペテルブルグには神学アカデミー、神学校、[ロシアの]4つの主要な大修道院のひとつであるアレクサンドル・ネフスキー大修道院も位置していた。聖使徒ペトロの街は北西ロシアの伝統を受け継いでいたが、ここは正教が深く根を下ろした地域であった。この地域はロシア文化とロシアにおける正教の基盤を生み出した最初期の古ロシア国家の一部であった。

1917年までに首都の主教区は国内最大で最も繁栄したもののひとつとなった。ペトログラードとその最寄の近郊には498の正教寺院があり、当時の首都大主教管区全域には、さらに750の正教寺院があって、16の修道院では約1700名が生活していた。10月革命の後、ロシア教会に苛烈な迫害が襲いかかってきても、主教区内では後に殉教者として列聖された100を超える聖職者がミサを続けた。その中にはペトログラードとグドフの府主教ベンヤミン（俗名カザンスキー）や致命者長司祭イオアン・コチューロフを数えることができる。レニングラードは1920年代から1980年代にかけてもまた、かなりの程度、国内の教会の中心地の役を果たし続けた。20世紀のロシア正教会の総主教のほとんどすべてがレニングラード府主教であるか（アレクシーI世、ピーメン、アレクシーII世）、もしくは主教区の臨時監督者（セルギー）であったことは偶然ではないのである。

サンクト・ペテルブルグの教会人たちは、国家の政治・社会活動におけるあらゆる変化に敏感に反応した。まさにこの都市で親ソヴィエト政権的な教会革新運動（1922年）とそれに対抗するイオシフ派の運動（1927年）が発生したのである。1917年時点のペトログラードでは、正教会は際立って確かな立場と一般大衆に対する影響力を有していた。したがって権力の極端な行動に対する抵抗は不撓不屈のものであった。たとえば、1918年1月のアレクサンドル・ネフスキー大修道院擁護運動は、長年におよぶ粘り強い教会の闘争の中でおそらく唯一のソヴィエト政府に対する大勝利を得ている。そしてトロイツキー聖堂に属した最後の政権反対派であるイオシフ派の共同体もまた、同じレニングラードで1943年まで合法的に存続しえた。サンクト・ペテルブルグ主教区の現代史もぬきんでて豊かである。そのことは、ソヴィエト時代にこの主教区を以下に挙げたような一群の傑出した府主教たちが率いた事実だけで十分だろう。聖ベンヤミン（俗名カザンスキー）、イオシフ（俗名ペトローヴィフ）、聖セラフィム（俗名チチャーゴフ）、アレクシー（俗名シマンスキー）、グリゴリー（俗名チュコフ）、ピーメン（俗名イズヴェコフ）、ニコジム（俗名ロトフ）、アレクシー（俗名リヂゲル）その他。

ファシストに包囲されたレニングラードでは、封鎖の期間中、10の正教寺院が活動しており、市民の精神力や物質的な支援を積極的に促した。1943年10月11日、12名のレニングラードの聖職者が、ソ連時代で初めて政府の賞「レニングラード防衛賞」メダルを授与された。1980年代の終わりになると主教区の目覚ましい発展が再び始まった。この時代主教区を率いたのは現総主教アレクシーII世である。何百という寺院・修道院が再び開かれ、アレクサンドル・ネフスキー聖公、ソロフキ修道院の奇跡者たち、サロフの聖セラフィム、ベルゴロドのイオ



サントペテルブルクのワシリー島

相互に影響し、混ざり合う場所であり、伝統的なロシアの諸地域と西側の隣接地帯なのである。現在のロシアの境目では、最大かつ何世紀にもわたる起源をもつカトリックとルター派の信仰が普及している。ロシア帝国のうち、おもにルター派の5民族（ドイツ人、フィンランド人、エストニア人、ラトヴィア人、スウェーデン人）とカトリック系2民族（ポーランド人、リトアニア人）の多くの人々が、ペテルブルグ一帯でのみロシア人と肩を並べて生活していたのである（部分的にはいまだにそうして生活している）。

彼らのうちにはペテルブルグ建都以前（フィンランド人）や18世紀（ドイツ人、ポーランド人、リトアニア人）にこれらの土地に現れたものもいる。ロシア福音派ルーテル教会の中央組織、すなわち総局兼サント・ペテルブルグ（ペトログラード）監督法院が、また国内のローマ・カトリック教会の主座であるモギリョフ大主教座と帝国唯一の神学アカデミーが1917年の10月革命までに北の首都に誕生した。そして1990年以降現在に至るまで、ロシアその他の国家における福音派ルーテル教会の長である事務局（最近までゲオルグ・クレチマール大主教）、福音神学校、カトリックの高等神学校がペテルブルグに再び展開している。

バルト海は1500年以上にわたり、沿岸に住む諸民族を結ぶ北欧の「地中海」であり、ロシアの北西部においてもこの相互影響関係はまったく一目瞭然に現れた。キリスト教受容以前の時代のノルマン、フィン・ウゴルそしてスラブの文化の交じり合いは、ここに735年以前に建てられた最古の街のひとつラドガ建都に起因する。スラブ系の宣教団の影響のもと、先住民のフィン・ウゴル系諸民族の間では11世紀から15世紀にかけて正教が漸次広まっていった。古代ロシアの国家が存在していた実質上ほとんどの間、北西部の大地はスウェーデン人とドイツ人のノヴゴロドへの対抗の舞台であった。福音派ルーテル教会は4世紀間、ローマ・カトリック教会は3世紀間にわたる歴史をこの地に持っているのである。18世紀の初頭にインゲルマンランドと呼ばれていた領土がロシア軍によって奪回された際、そこにはフィン系の住民が多数残った。17世紀に既にインゲルマンランドで教育的・文化的機能を果たすようになっていた地元のルーテル教会は、その後もその教区民を維持し続けた。この教会の教義は農民をふくめたすべての大衆がこれを受け入れることを前提としており、理想として彼らに宗教文学を読む能力が求められた。そのために、それぞれの教区にはいくつかの学校、図書館、聖歌隊などが存在していた。

ペテルブルグは1703年の建都以降、ロシア国内でもっとも多民族的で多宗教的な都市のひとつであった。1910年の首都の全人口1,905.6千人のうち、ロシア人は82.3%を数え、ポーランド人が65千人（3.4%）、ドイツ人が47千人（2.5%）、エストニア人が23千人以上、ラ

アサフ、サント・ペテルブルグの庇護者として名高いクロンシュタットの聖イオアン神父とペテルブルグの聖女クセーニャらの聖骸が宗教史博物館から教会へ返還された。このプロセスは21世紀のはじめにおいても継続中である。

しかしこのネヴァ河畔の町に広がっているのは正教会だけではない。サント・ペテルブルグとその周辺地域はその独自性で際立っている。ここは宗教がその一要因をなす民族文化が相

トピア人が18.5千人、フィンランド人が18千人、リトアニア人が11.5千人、スウェーデン人が3千人であった。1916年から1920年にかけて、ロシアの西方諸県からの避難民の流入にともなって、非ロシア人人口は最多に達した。宗教生活はロシア人ばかりでなく、多民族的な首都とその周辺に住まうその他の民族にも特別な意味合いを持っていた。教区こそが民族共同体の結集する中心点であり、ペテルブルグに住まう諸民族の文化的中心地となったのである。首都においては正教信者が圧倒的多数を占めており、その上で外的な世俗要因と内的な教会のその組み合わせや、様々な宗教的伝統に対する寛容の原則に基いた混ざり合いがあり、そこにペテルブルグ文化の独自性があった。諸民族の文化的相互関係の形式と要因としてのキリスト教諸教会の意義は、その生活と活動の様々な側面で現れた。

1910年代ペトログラード県には570のフィンランド人の日曜学校が活動しており、都市内部では39のドイツ人の教区学校があり、ペトロ学校（Петершulle）とアンナ学校（Анненшulle）は帝国内でも最高のものに数えられた。リトアニア人とポーランド人にとって、もっとも重要な精神生活の拠点は1842年にヴィルノから移転されたカトリックの神学アカデミーで、貴重な図書館を備えており、一連の慈善団体が存在した。ペテルブルグのポーランド人コミュニティは農奴解放後、取り立てて数が多いこと（1917年で10万人以上）と活発な動きが目覚しかった。エストニア人の学校も4校活動していた。

エストニア人とラトビア人にとってペテルブルグは民族文化発祥の中心となった。というのもリーヴランドとエストランドでは完全にドイツ文化が支配的だったからである。帝国の首都では最初の演劇学校が設立、エストニア語、ラトビア語での演劇上演が行われ、しかるべき新聞が発行されて、民族宗教音楽のコンサートが催され始めた。ペテルブルグ在住のラトビア人とエストニア人の精神的・倫理的発展を促進したのは、「ラトビア社会集会」（1895年）、「ラトビア青少年教育協会」（1911年）、「クリトゥーラ（文化）」（1910年）、最初のラトビア語の新聞を出版した「スヴェート（光）」（同年）、ペテルブルグの「エストニア人協会」（1907年）、「ルター派信仰エストニア青年協会」（1897年）に違いない。

ペテルブルグにおけるこれら諸民族の文化的・社会的生活の結集点であったのはそれぞれの教区であり、まずルーテル教会のそれ、そして正教会のそれであった。1840年代にはリーヴランドでラトビア、エストニア農民のルター派から正教への自然発生的な大量改宗が始まり、1883年からはそれはエストランドの農民にも及んだ。土地を持たない農民はペテルブルグ県境の雇われ仕事に移り、首都と県内にエストニア人の教区が組織され始めた。主教区のエストニア人正教寺院の立役者の中には、クロンシュタットの聖イオアン神父のほか、列聖された6名の新致命者（内3人がロシア人で、3人がエストニア人の司祭）がいる。「正教＝ロシア的な原則導入のために」パーヴェル・クリブシュ司祭（殉教者プラトーン司祭）は、エストニア語で教え、ロシア語を学ぶ、エストニア人のための最初の教会・教区学校を創設する許可をもらった。

教会・社会活動、また文化活動は民族的な特徴から常に独立していたわけではない。多くの非正教共同体ははっきりとした民族的な性格をもっていたが、教区の中には混合的なものもあった。例えばクロンシュタットにはルター派の2教会—エストニア・フィン・スウェーデン聖ニコライ教会とドイツ・ラトビア聖エリサヴェータ教会—があった。これら非正教寺院は住民の民族的構成ばかりか、都市の外国との繋がりや性格をも反映していた。フィンランド語とエストニア語は同族語であったし、ラトビア人とエストニア人のかなり多くはドイツ語を解し、彼らの教区の牧師を務めたのはドイツ人であることがままあったためにも、コミュニケーションは容易であった。クロンシュタットでエストニア人正教徒のために買いだされたイギリス国教会の建物の中では、契約の条件にしたがって、どちらの共同体も祈禱を挙げる事ができた。

20世紀初頭にまさにサンクト・ペテルブルグで、ロシア人ルター派とロシア人カトリックの運動が発生したこと、また主教区においては7つの教区でエストニア人正教徒の監督司祭教区が組織されたことは偶然ではない。ロシア人ルター派の運動がペテルブルグのロシア化したドイツ人たちの末裔の間で当初形成され、伝統的な教区との結び付きが明白であったのに対し、ロシア人カトリックはその他のカトリックの教区からむしろ独立したのものとして発生したものであり、エスニックなものではなく、理念的宗教的あるいは理知的な素地を持ったものだった。

ロシア人のカトリック、ルター派共同体の出現に関することを含め、国家権力と非正教の関係は常に青天白日といったふうではなかった。たとえば、ロシアとローマの間の長年にわたる対立の関係から、ローマ・カトリックの共同体の活動はある種の複雑さを帯びていた。第一次世界大戦もまたさまざまな宗教間、民族間の関係を一時的に先鋭化するものであった。10月革命の後の飢餓、破壊、弾圧、難民や捕虜の自国への帰国、外国籍の取得などによって、ペトログラードの非ロシア人人口は著しく減少した。

しかし、ロシアのルター派やカトリックの民族間のつながりは革命後強化された。一方では民族的な自覚の高まりと、さまざまな民族の文化的な自治体を創設するプロジェクトとの関係で、後に最高教会評議会と改名されるエストニア、フィンランド、ラトビアの総合監督法院が1917～1922年の間に組織された。他方、ソヴィエト指導部の反宗教運動が始まったことによって、信者たちは団結する必要に迫られ、1924年6月にはソ連福音派ルーテル教会最高宗教会議が組織された。この会議は国内すべての民族を統一する唯一の教会を創設することを宣言した。それほど目立ったものではなかったが同様の動きはカトリックの間にも見られた。

新権力が禁止したにも関わらず、多くの学校では1920年代末まで、レニングラードのルター派共同体では1938年まで、宗教教育が続けられた。この北の首都では1934年の夏までソ連で唯一のルター派神学校が機能していた。革命後もしばらくは宗教的な出版活動を行う余地が残されており、例えば1927～1930年にかけては教会カレンダーと雑誌『わたしたちの教会』がドイツ語で出版された。これもまたレニングラードで半ば合法的に存続していたカトリックの神学校は1927年に破壊された。1938～39年の大規模な反宗教キャンペーンで最後のルーテル教会が閉鎖された。カトリックの教会ではレニングラードにひとつだけ活動している教会が残ったが、そこでも1941年からは司祭がいなくなった。また当時党の州委員会と市委員会のビューローの決議案に基づいて大多数の民族学校と民族文化施設が廃止された。

迫害、強制収容所、流刑の状況下、人々の心の中に信仰は生き続けた。1950年代後半から追放されたフィン、ドイツ、エストニア系住人がレニングラードおよびレニングラード州に戻り始めた。1977年には長い断絶の期間を経てはじめてルーテル教会がプーシキン市に開かれ、フィンランド人＝インゲルマンランド人の精神的・文化的生活の中心となった。教会の大規模な復興が始まったのは1980年代の末のことである。現在、北の首都には18のルター派共同体と13のカトリック共同体が存在している。かつてと同じように、サンクト・ペテルブルグとその一帯は総体として、復活したロシア福音派ルーテル教会、イングリシア福音派ルーテル教会の中心地となり、またかなりの割合でロシア連邦におけるローマ・カトリック教会の中心地ともなったのである。

宗教的多様性、宗教的寛容、相互理解は歴史的・文化的に継承されてきたために、ペテルブルグにおいて現在も保たれている。それとともに聖使徒ペトロの街はなによりもロシア正教会の重要な拠点のひとつであり続けている。21世紀の初頭、サンクト・ペテルブルグ主教区では458の教区・登録教会があり（内218がペテルブルグ市内）、172の礼拝堂、12の修道院、17の修道院付属寺院が活動している。北の首都は正教神学教育の中心地でもあり、神学

アカデミーや神学校のほか3つの進学大学や多数の神学講座、学校などが教育に当たっている。サンクト・ペテルブルグの府主教は聖シノドの常任メンバーであり、市内にはモスクワ総主教庁渉外部支部が置かれ、教会アーカイブ文書の主要なコレクションがあり、ロシア正教会全体にとって意義を持ち、特に崇敬されている聖物が保存されている重要な寺院が点在しているのである。

(ロシア語から高橋沙奈美訳)